

## 『在明の別』の世界：ハイパー〈かぐや姫の物語〉 の誕生

辛島，正雄  
九州大学：名誉教授

<https://doi.org/10.15017/6617886>

---

出版情報：語文研究. 132, pp.1-14, 2021-12-17. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：

# 『在明の別』の世界

——ハイパー〈かぐや姫の物語〉の誕生——

辛 島 正 雄

## はじめに

かつて筆者は、『在明の別』の主人公である女院を取り上げ、その〈かぐや姫〉性について論じたことがある（拙著『中世王朝物語史論 上巻』二〇〇一年、笠間書院）所収『在明の別』覚書——女院の〈かぐや姫〉的性格について）。ここでは、物語において、女院の前生が天女であることの種明かしの趣向に、古い〈羽衣伝承〉との深い繋がりが見られるので、そのことを指摘することに眼目を置いた。また、当時の筆者は、『竹取物語』そのものではなく、伝承的な世界をも含み込んだ、括弧つき『竹取物語』の物語史的な位置づけに、むしろ関心が向かっていたため、『竹取物語』そのものと直接対比するところにまで

踏み込むことはせず、両者の関係性については、かろうじて、

右大将は、左大臣家の跡嗣ぎ問題を解決すべく、男の姿で地上に遣わされた〈かぐや姫〉であったとでも評せよう。ところが、任務を遂行しながらも〈昇天〉の機を逸したがため、さらに地上での生活の継続を余儀なくされたわけである。（三二〇～三二二頁）

と説くにとどまっていた。ところが、今般、あらためて『在明の別』に向き合い、一から読み直す機会をもった（拙著『在明の別残月抄——天下の孤本を新しい校訂本文で読み解く』二〇二一年、九州大学出版会）ところ、〈異性装〉や〈隠形〉といったわかりやすい特徴のもとと深部に、『竹取物語』そのものが、真正面

から、しかも大胆に踏まえられていることに、気づかされた。本稿は、そのような『在明の別』をめぐる、『竹取物語』のいかなる後裔であるかを、具体的に解き明かそうとするものである。

## 一 「絵合」巻の『竹取物語』評

『竹取物語』の物語史的な位置づけを考えるさい、誰ももの腦裏に真っ先に浮かぶのが、い、うまでもなく『源氏物語』の「絵合」巻での言及であるう。

「物語の出で来はじめの親なる竹取の翁に宇津保の俊蔭を合はせて争ふ」（『新編日本古典文学全集』本②三八〇頁）ところから始まった絵合は、まず『竹取物語』について、左方による応援、というより擁護の発言がなされ、次いで、右方からの論難がなされる。じつは、ここでの議論が、『竹取物語』の後裔たる『在明の別』を理解するための、大きな鍵となりそうなのである。それぞれを引用する。

（左方）「なよ竹の世々に古りにけること、をかしきふしもなければ、かぐや姫のこの世の濁りにも穢れず、はるか  
に思ひのぼれる契りたかく、神世のことなめれば、あさ

はかなる女、目及ばぬならむかし」と言ふ。（②三八〇頁）

右は、かぐや姫ののぼりけむ雲居はげに及ばぬことなれば、誰も知りがたし。この世の契りは竹の中に結びければ、下れる人のことこそは見ゆめれ。ひとつ家の内は照らしけめど、もししきのかしこき御光には並はずなりにけり。（後半省略）（②三八〇―三八二頁）

左方は、まず大前提として、「なよ竹の世々に古りにけること、をかしきふしもなければ」とのただし書きの必要な、今日的な魅力に乏しい物語であることを承知のうえで、こゝに「圏点を施した和歌的レトリック（竹取の翁が詠んだ「くれたけのよよのたけとり野山にもさやはわびしきふしをのみ見し」（『新編日本古典文学全集』本三三頁）」の歌を想起させる）による輓晦のいっぽう、右方の「あさはかなる女」になど、その価値はわかるまい、と挑発すること、かろうじて、「この世の濁りにも穢れず、はるかに思ひのぼれる契りたか」いかぐや姫の姿勢を、称揚しようとする。ところが、右方からは、かぐや姫の昇天して行つた先のことは、「あさはかな」わたしたちはもちろん、あなたたちを含めた誰にとつても、しよせん理解不能な世界なのだから、この点を言い争つたところで無駄である。そこで、あらため

て物語の内容そのものを問うなら、これはまあ、あそこもこのもと不満を覚えることばかり、とうてい見どころのある物語とはいえないと、手厳しい。

ここでの難陳（このあとの、左方『伊勢物語』、右方『正三位』の番いも含めて）について、『新編日本古典文学全集』の頭注では、次のように整理している。

左方（斎宮の女御方）が作中人物の精神の高潔、古代への回帰に論評の基準をおくのに対し、右方（弘徽殿女御方）は出自や朝廷とのかかわりの度合、現代的なはなやかさを重んずる。（②三八三～三八四頁）

もつとも、準備の段階から、

梅壺の御方は、いにしへの物語、名高くゆゑあるかぎり、弘徽殿は、そのころ世にめづらしくをかしきかぎりを選び描かせたまへれば、うち見る目のいまめかしき華やかさは、いとこよなくまされり。（②三七九頁）

という状況であったので、このような違いが現れるのは、予想どおりの結果であった。

『源氏物語』が『竹取物語』から受けた影響の種々相については、さまざまな方面からすでに論じ尽くされた観があり、とくに、結婚拒否を中心とした（女）の造型とその運命に色濃く現れていることも、周知のところである。そして、『竹取物語』の文学としての真価が『源氏物語』において存分に汲み上げられた割に、後期の物語での『竹取物語』受容は、表層的、あるいは『源氏物語』を介した間接的なものである、ともいわれる（河添房江著『源氏物語表現史 暎と王権の位相』「一九八八年、翰林書房」所収「源氏物語の内なる竹取物語」ならびに「竹取物語の享受史」を参照）。それでも、左方のいう、「この世の濁りにも穢れず、はるかに思ひのぼれる契りたか」い（女）を描き出すことを、『源氏物語』以下、『夜の寢覚』や『今とりかへばや』などにおいても、ひたむきに追求してきた、と評することはできよう。

ところで、左方による、いわば苦し紛れのプラス評価に較べると、右方による『竹取物語』の弱点についての指摘は、いちいちが的を射ており、たしかに、古色蒼然たる時代遅れの物語（総合）巻の直前に、貧窮する未摘花の消閑の具のひとつとして、わざわざ「かぐや姫の物語」「蓬生」巻②三三一頁）が出ていたことも、意味深長である）にとつて、痛いところを突かれたと認めるほかあるまい。俊蔭について、「つひに他の朝廷にもわが国にも

ありがたき才のほどを弘め、名を残し」(②三八一頁)たと、その実績を称揚するのと較べても、見劣りは歴然なのである。ところが、よくよく観察すると、ここで指摘された『竹取物語』の欠点の数々というのが、そのすべてを反転させるや、あら不思議、たちまちそれは、ほかならぬ『在明の別』の際立った特長として、理解できてしまうのだ。すなわち、「この世の契りは竹の中に結びければ」云々とあつた批判を、

この世の契りは春日の神に結びければ、貴き人たかのこととこそは見ゆれ。ひとつ家の内を照らしけるのみならず、ももしきのかしこき御光にも並びにけり。

とでも書き換えれば、この物語の世界は、ほぼ俯瞰できたも同然なのである。

## 二 父と娘の因縁

まず、ふたつの物語における「この世の契り」について考えてみよう。『竹取物語』は、かぐや姫と竹取の翁との間の宿縁の物語であるが、同様に、『在明の別』も、女院と父大臣との、父と娘の宿縁の物語である。『在明の別』において、父

と娘による〈二人三脚〉が、どのように展開しているかについては、前掲拙著・前編・第三章「父と娘の旅路」において、詳細に述べたところであるが、そうした因縁の由来についてまでは、とくに言及することをしなかった。ところが、そこそが、『竹取物語』における翁とかぐや姫との因縁を淵源とするものと思われ、なおかつ、そこからの大胆かつ手の込んだ作り換えによって、『在明の別』の父と娘の関係性は、構築されたものと見える。

周知のことではあるが、かぐや姫と竹取の翁との因縁は、迎えに来た天人たちのなかの「王とおほしき人」の発言のなかで、明瞭に語られている。

「汝、幼き人。いささかなる功德を、翁つくりけるによりて、汝が助けにとて、かた時のほどとてくだししを、そこの年ごろ、そこの黄金こがね賜ひて、身を變へたるがごとくなりたり。かぐや姫は罪をつくりたまへりければ、かく賤しきおのれがもとに、しばしおはしつるなり。罪の限りはてぬれば、かく迎ふるを、翁は泣き嘆く。あたはぬことなり。はや返したてまつれ」(七一〜七二頁)

すなわち、翁が前世において積んだ少しばかりの善根への

果報として、贖罪期間中のかぐや姫を翁の側に遣わした結果、翁は別人のように裕福になった、とする。この因縁については、竹の中から「三寸ばかりなる人」を発見した最初に、翁

が、「子になりたまふべき人なめり」（一七頁）と、運命の出会いであることを直感していたわけであるし、かぐや姫の口からも、「昔の契りありけるによりてなむ、この世界にはまうで来たりける。」（六五頁）と語られてもいた。この父と娘の因縁を、『在明の別』では、藤原撰開家の氏の長者のかかえる（家の問題）のなかへと持ち込んだ。その結果、左大臣は、翁同様、ひとり娘を授かることとなったのだが、もとより左大臣は、翁のような「賤しき」身ではない。当代随一の権勢を誇る家に、物質的な不満などない。娘への期待は、まったく別のところにある。

翁が裕福になったのち、もつとも腐心したのが、美しく成長し、裳着を終えたかぐや姫の、結婚問題であった。「色好みといはるるかぎり五人」（二〇頁）による求婚譚も、もともと、その問題を解決するために始まったはずなのだが、翁の意識する（家の繁栄）という目標は、そもそも『竹取物語』においては、まるつきり関心の外ほかに置かれている。なにしろ、「変化」（二一・二三頁）の身で、「この世の人」（二三頁）でないかぐや姫は、いずれ昇天する定めなのだから、暫時化生した

にすぎぬ人間界で作った新たな絆など、そのさいの邪魔になるだけのはなしである。

しかし、『在明の別』では、翁がかぐや姫に説いた、「男は女にあふことをす。女は男にあふことをす。その後なむ門かど広くもなりはべる。」（二三頁）という、「この世の人」に求められる（一門繁栄）に貢献する生きかたが、当然ながら娘には期待される。左大臣がかかえる家の問題のひとつは、それによつて解決するはずであるが、それだけでは、まったくもつて不十分なのである。もつと本質的な家の問題、すなわち跡継ぎの問題が、なおも存在しているのだ。それが、左大臣に「嫡男がいないうことである。かろうじて授かったのは、ひとりつかりの娘——、このまま放置すれば、家は断絶するほかない。そんな窮地に立ったときに発動したのが、前掲拙著・後編・第六章「巻一読解考——「この君はかりかにこもり給て」を中心に——」で述べたような、「春日の神」の神慮であった。将来への危機感と焦燥から春日神社に参籠した左大臣は、夢の中で、氏の長者の窮状を救うべく、ありがたくも春日の神の啓示を蒙り、迷いなくそれに従つて、娘を嫡男へと仕立てたのである。よつて、順序としては、まずは左大臣に優秀な嫡男がいることを世間に知らしめ、一家の繁栄、安泰を印象づけることが先決であり、そのうえで、嫡男は正妻を迎えることとな

る。正妻は男子と女子を生み（もちろん、実の父親は別にいるのだが）、家の跡継ぎとなるべき孫が確保され、そのいつぼうで、男装している秘密を帝によつて暴露された嫡男は、唐突に死去と公表され、男装を解いたのち入内して女御となり、娘としての本来の役割に専念することとなる。

このように、〈家の問題〉の解決のために、いかに娘が、困難な状況下、自己犠牲をとまないつつ最善を尽くしたか、また父も、娘の扱いにどれだけ気をつかいつづけたかについて、前掲拙稿「父と娘の旅路」において詳しく述べておいたが、それは、どれほど手厚い「春日の神」の加護のもとにあつても、じつさいには、薄氷を踏むような〈父と娘の二人三脚〉なのであつた。そのような物語が、竹取の翁とかぐや姫との因縁をアイディアの根幹に据えながら、目くるめく、怒濤の展開を見せる〈家の物語〉へと、変幻自在の筆さばきによつて巧みに再構築されていることを、ここではしつかり確認しておきたい。

なお、『竹取物語』において、帝の使者である「内侍中臣のふさ子」（五六頁）との応対に当たる以外、ほとんど目立たない姫（後藤康文「この「翁」は「姫」である——『竹取物語』の本文批判——」「同氏著『日本古典文学読解考——『万葉』から『しのびね』まで——』二〇一二年、新典社）所収」では、作中の「姫」の登場する箇所を

すべて拾い出して、五人の「色好み」による求婚譚では、阿部の右大臣のエピソードに、「かく呼び据ゑて、このたびはかならずあはむと姫の心にも思いをり。」「四〇頁」と見えるのが唯一であることを確認し、その直後の、「この翁は、」について、「翁」は「姫」の誤りと見るべきことを説いているが、筆者は、庫持の皇子のエピソードに、「翁は、閨のうち、しつらひなどず。」「三〇頁」とある「翁」も、「姫」の誤りではないか、との疑いをもっているが、天人が迎えに来る緊迫の場面では、かぐや姫を守ろうと、施錠した「塗籠の内」（六八頁）に、命がけで、ともに身を隠す。左大臣の北の方である母宮の場合も、同性であるがゆえの、父とはまた異なる特別な絆が、母と娘との間に窺えることについても、右の拙稿のなかでふれている。

### 三 〈かぐや姫の昇天〉の変奏

『竹取物語』のクライマックスは、いうまでもなくかぐや姫の昇天のくだりである。そこでの文学的な達成や趣向を、『源氏物語』以下の多くの物語が意識し、また摂り込んでいることについても、すでに多くの議論が積み上げられており、今さらここで振り返る必要もあるまい。では、その点を、『在明の別』ではいかに引き継いだか、ここで確認してみよう。



〈かぐや姫の昇天〉との重ね合わせのポイントとして、さまざまな物語を通じて、とりわけ目につくのが、「八月十五夜」へのこだわりである。『在明の別』もまた例外ではなく、その日付は、右大将の正体暴露の前日、というかたちで特筆されている。そのことの意味についても、冒頭でふれた拙稿において、

それにしても、右大将が帝と契るのは、なぜ八月十六日なのか。「八月十五夜」の翌日との記述のしかたは、その理由を、さりげなく示しているように思う。すなわち、右大将の望む〈昇天〉は、『竹取物語』以来の先例に従って、「八月十五夜」にこそ実現されるべきだったのであるまいか。しかるに、その機会を逃したため、かれはたちまちその翌日には、地上に引きとどめられるべく、新たな関係に繋がれてしまった、という次第なのである。  
(三一〇頁)

と述べておいた。しかしながら、〈昇天に失敗したかぐや姫〉とでもいふべき立場となった娘は、それ以後も、父との二人三脚の関係を緩めることはしない。その理由は、みずからに課せられた使命——「春日の神」の託宣に従い、氏の長者と

しての家格を守りつづけること——について、父との間にたしかな意識の共有ができていたからである。右大将時代の正妻が生んだ男子と女子が、それぞれ左大臣、中宮として、氏の長者の一員らしい役割を果たすのを、父とともに、陰でしっかり見守っているのである。

さて、かぐや姫は、当初から、じしんが「変化の者」(二二頁)である自覚をもっていたのであるが、右大将Ⅱ女院は、「天人」や「天女」と関係づけられながらも、じしんの正体を承知しているわけではなかった。それが明らかになるのは、物語も終盤、院の四十の賀が催されたおりのことである。東宮の吹く横笛と女院の弾く琵琶の合奏に感応して、七人の天女が降臨するという奇瑞が起こり、天女たちが空に還って行ったあとの残り香が、女院のいつもの香りと同一であったことから、その前生が判明したのである。そのさいには、天女のひとりとして女院との間で、歌もかわされた(『在明の別』の引用は、『天理図書館善本叢書6 あさちが露・在明の別』(一九七二年、八木書店)に基づき、わたくしに作成した校訂本文による)。

(天女) この世にはいかゞとゞめむ 君とわが昔手折りし  
花のはな一ひと枝えだ (29ウ)  
(女院) 花の香かは忘れぬ袖にとゞめおけなれし雲居くもゐに立ち



帰るまで（30才）

これによれば、天女のひとりと女院とは旧知の仲であり、いずれ女院も、「なれし雲居」Ⅱかつて住んでいた天女たちの世界に帰還する心づもりである、とわかる。

けつきよく、女院の昇天が描かれることはないのだが、代わりに描かれるのが、女院の稀有な宿世により、天皇の外戚として盤石の態勢を固め、氏の長者としても、立派に成長した孫の左大臣にすべてを託して、満足裡に最期を迎える父大臣の姿である。かぐや姫が昇天したあとの翁は、嬪とともに、「血の涙を流して」（七六頁）悲しんだのであったが、〈昇天に失敗したかぐや姫〉は、父の最期に立ち会い、喪に服する。かぐや姫は翁と嬪に宛てて、「この世に生れぬるとならば、嘆かせたてまつらぬほどまで（一緒に暮らすのが当然なのに、そのようには）侍らで（侍らん。」と校訂するのを、底本のかたちに戻した——辛島注）過ぎ別れぬること、かへすがへす本意なくこそおぼえはべれ。」（七三頁）と、子として親孝行を全うできずに別れるほかないことを無念に思う旨、文に書き残しはしたものの、昇天する側も、残される側も、双方ともに悲嘆にくれるほかなかった。それがここでは、思い残すことのない、静かな別れとなっている。それでも、父の死に、この世の無常を悟っ

た女院は、じしんの失われた半身として、もつとも信頼する東宮に宛てて、

目の前のさらぬ別れを身に知ればいよく君を恋ひぬ日  
ぞなき（47才）

と、作中最後の歌を詠みかける。従来この歌は、東宮から女院に贈られたものと解されていたのであるが、本歌となる『伊勢物語』第八十四段での贈答歌との対応関係からも、女院の歌と見るべきであることは、前掲拙著・前編・第一章「作中和歌から何が見えるか」において詳説したとおりであり、女院じしんも、大切な人たちとの「さらぬ別れ」を、覚悟しているのである。

かぐや姫は、帝に宛てて、

今はとて天の羽衣着るをりぞ君をあはれと思ひいでける  
と、最後の最後に、じしんの本心を歌にしたためた文を勅使に託すが、その直後、「ふと天の羽衣」を着せられ、翁を「いとほし、かなし」（七五頁）と思っていた感情も消えて、そのまま昇天して行った。女院の「目の前の」の歌は、「昔男」の

母の歌を踏まえるだけでなく、このかぐや姫の歌とも、響き合っている。この思いよ、「君に届け」とばかりに——。女院も、かぐや姫さながらに、「なれし雲居に立ち帰る」日の、そう遠くないことが予想されよう。

#### 四 帝との関係

さきの右方の批判にあるように、「もしもきのかしこき御光には並ばずなりにけり。」という、中途半端な関係のまま終わった『竹取物語』において、かぐや姫が唯一心を通わせた異性が、じつは帝である。それに対して、『在明の別』では、右大将の男装の秘密を暴くのが、ほかならぬ帝である。ここには、どのような継承や変奏がなされているのであろうか。

『竹取物語』の帝は、かぐや姫の噂を聞き、興味を覚えると、まずは宮中への出仕を命じてみるものの、勅使を遣わずだけでは埒が明かない。そこで、翁と相談のうえ、御狩の行幸を企て、翁の家に立ち寄った。すると、「光満ちてけうらにてるたる人」を見つけ、「これならむ」と思って、強引に連れ帰ろうとする。ところが、「いと率ておはしましがたくやはべらむ」との忠告を無視し、「御輿を寄せ」たところ、「きと影にな」る異能を見せつけられたため、「げにただ人にはあらざ

りけり」(六一頁)と悟り、強硬手段の行使は、あえなく断念の仕儀となる。ここに、『在明の別』で異彩を放つ(隠形)の趣向が見えるのも興味深いが、右大将の(隠れ蓑)の能力が、帝との契りによつて失われたとされる展開とも、どこか繋がりがありそうだ。それはともかく、一目見たかぐや姫に、帝はたちまち魅了された。別れ際も、「あかず口惜しく」思われ、「魂をとどめたる心地」(六三頁)がして、輿に乗ったあとに歌のやりとりをすると、「いとど帰りたまはむ空もなく」感じられるのだが、「夜を明かしたまふべき」(六三頁)ではないということ、還御する。

御所に戻った帝の日常は、一変した。

つねに仕うまつる人を見たまふに、かぐや姫のかたはらに寄るべくだにあらざりけり。異人ことひとよりはけうらなりと思しける人も、かれに思し合すれば、人にもあらざ。かぐや姫のみ御心にかかりて、ただ独り住みしたまふ。よしなく御方々にも渡りたまはず。(六三頁)

帝は、これまで自分に仕えてきたすべての女官や皇妃への興味を失い、ひたすらかぐや姫のことばかりを思うようになった。その後、かぐや姫との文のやりとりが始まり、それが三

年ほどつづいたことが記される。その間、帝が「独り住み」をつづけ、皇妃を誰ひとり清涼殿に召さなかつたとすれば、これはまた異様な事態というべきである。なぜなら、帝王たるものの務めのなかには、いうまでもなく後継の皇子をもうけることが含まれるのだから、これでは、その大切な使命を、放棄したも同然であるのだ。

では、『在明の別』の帝はどうであったか。帝は、はやくから右大将の妹の姫君の入内を熱望し、父である左大臣にも、そのことをしきりに要請していた。そのいっぽう、皇妃としては、右大臣の大君（督の君）を筆頭に、すでに多数の皇妃が仕えていたが、皇子の誕生がなく、それが心待ちにされる状況であった。そんななか、思いがけず帝が契りをおこなったのが、男装の麗人＝右大将である。八月十六日、衝撃の一夜のあと、右大将恋しさに身悶えする帝と、秘密を知られ絶望の淵に沈んだ右大将との間で、息の詰まりそうな緊張関係がつづく。どうなるのか、先の読めない状況下、右大将急逝の報が京中を駆け巡り、帝の悲嘆が最高潮に達するなか、喪中の左大臣が御所を訪れたところから、もつれた糸はほぐれはじめ、待望久しい左大臣の姫君の入内が実現した。この姫君とは、いうまでもなく故右大将その人である。帝の寵愛が、この女御ひとりに注がれたことは、いうまでもない。そこでは、

「さらに、「又人またひとやある」ともおぼし召めしたらさず、朝政あさまつりてをこた怠おぼらせ給ひぬべき御さまなめり。」(72才)とあるように、「桐壺」巻に、「なほ朝政は怠おぼらせたまひぬべかめり。」(①三六頁)とあるのを彷彿させる表現が用いられているのだが、同時に、かぐや姫ひとりを思い、ほかの皇妃に見向きもしなくなった『竹取物語』の帝の面影も、重なってくる。

かぐや姫は、帝に宛てた文のなかに、

宮仕へ仕うまつらずなりぬるも、かくわづらはしき身にてはべれば。心得ず思しめされつらめども。心強くうけたまはらずなりにしこと、なめげなるものに思しめしとどめられぬるなむ、心にとまりはべりぬる。(七五頁)

と、帝の思いにこたえなかつた、いな、こたえられなかつた事情を説明している。してみると、『在明の別』の右大将とは、〈帝の思いにこたえたかぐや姫〉とでも評することができよう。さきに、同じ右大将を、〈昇天に失敗したかぐや姫〉と評したのであったが、このふたつの側面は、同じ事柄の、いわばコインの裏表の関係にある。『竹取物語』の帝は、富士山頂で、かぐや姫宛ての文と不死の薬とを燃やさせ、永遠に尽きることをないかの女への思いを、立ち昇る煙に乗せて伝え

ようとしたのだが、うって変わって『在明の別』の帝は、ふたりの皇子に恵まれ、それぞれ帝と東宮となつて、みずからの皇統も安泰であることから、退位したあとは悠々自適、愛する女院との仲睦まじい日々をおくり、すこぶる満足そうである。

ただし、女院が、夫である院をどのように思っていたのかは、かならずしも明らかでない。院のほうが、右大将の秘密を知り、契りをおぼしたときから、ほかの皇妃には見向きもしなくなり、以後も女院ひとりに変わらぬ愛情を注ぎつづけていることは明白のだが、女院がかぐや姫のように、「君をあはれと思」っているのかは、じつははっきりしないのだ。最初の妊娠のさい、里下がりして、心細い思いをしていることが、次のように描かれている。

人（＝対の上）の御上に、恐ろしく見扱はれしこと（＝妊娠と出産）を、御身に悩まれ給ふも、まことにめづらしき身の宿世はさらにもいはず、我御身ながら、あまり世にあまるばかりの御さとの深さにて、「なべての人に違へるは、かならず長かるまじくや」と、たゞかりそめにのみ思ひなれ給ふまゝに、「内裏の上の、かつ御覧するだに、安積の沼にのみおぼし乱れたるに、むなしくも聞

こし召しなば、又いかばかりおぼしまどはん」と、さまざまあはれなる事のみおぼしつゞけらる。（74ウ〜75オ）

これを見ると、自分を愛してやまない帝を残して先立つた場合、どんなに悲嘆にくれることかと、「あはれ」に思いやっていることは確かである。しかし、このときの不安は杞憂に終わり、その後、自分に似た第二皇子も無事誕生してからは、佳人薄命の心配からも解放されたかのごとくで、院の四十の賀まで、じつに二十年の間、平穏な日常がつづいた。

大堰の地で、父の喪に服する女院に対して、離れて過ごす院の様子が、

（自分も一緒に）たゞ籠りおはしますべくのたまはせ掟てしかど、（女院が）あるまじき事に聞こえさせ給ひしかば、（仙洞御所で）若くしき御ひとり寝に、長くしき夜を、今さらの御片敷きのすさまじさなり。（46オ）

と描かれている。院の女院への愛情は、不変である。それでも、喪中の女院が歌を詠みかわすのは、さきにも述べたとおり、ひとり、東宮がいるのみなのである。描かれることのない女院の臨終＝昇天のシーンを思い浮か

べるとき、かの女は、かぐや姫のように、院への思いを、最後に披瀝するようなこともないのだろう、と思われる。そのいっぽうで、院は、『竹取物語』の帝さながら、最愛の人を失い、悲嘆にくれることであろう。この構図は、冒頭の拙稿のなかで引用した、『帝王編年記』卷十所載の「伊香の小江」の伝承へと、先祖返りするかのようでもある。伊香刀美によって天の羽衣を隠され、やむなく地上にとどまり、その妻となった八人の天女のなかの年下のひとりとは、二男二女を生んだのち、天の羽衣を探し出し、それを着て、本来の住処である天に還って行く。残された男は、「独り空しき床を守りて、吟詠ながめすること断やまざりき。」（原漢文。「新訂増補国史大系」本一四八頁）という結末を迎えるのだが、これは、右に引いた、独り寝をかこつ院の姿に通ずるものがある。

### おわりに

さきに筆者は、「絵合」巻での右方による『竹取物語』への鋭い批判を、くるりと反転させるや、たちまち『在明の別』の基本設定へと読み換えられることを述べたのだが、その具体相は、以上に述べてきたとおりである。最後に、両者の対応関係を整理したうえで、その要点を掲げておこう。

### I 父と娘の因縁

翁、「竹の中」に小さな子を発見、家に持ち帰り、子とする。

前世において翁の作ったささやかな善根の果報として、贖罪期間中のかぐや姫を授かったものであり、以後、別人のように裕福となる。

### II 娘の結婚

裳着を済ませたかぐや姫に、余生の短い翁は、結婚して夫をもつことを望む。五人の求婚者は、ことごとく結婚に到らず。

### III 帝の登場

五人もの貴人を滅ぼした女に興味をもち、翁の家に行幸、力づくでかぐや姫の連れ去りを図るも、〈隠形〉の異能を見せつけられ、あ

### I 父と娘の因縁

藤原摂関家の氏の長者である左大臣は、ひとり娘を「春日の神」の託宣に従い、嫡男として振る舞わせる。

### II 娘の結婚

ひとり娘は、男装しているため、結婚できない。嫡男としては、正妻をもうけ、一男一女を得る。

男装の秘密を帝によって暴かれたのち、右大将死去と称して、姫君にすり替え、入内が実現。

### III 帝の登場

右大将の男装を見破り、契りをおかずも、再びの逢瀬をもてぬまま、右大将は死去。故右大将が女御として入内すると、ほかの皇妃には見向きもしなくなる。右大将時代に発揮した〈隠

えなく断念。

一目見たかぐや姫が忘れられず、ほかの皇妃を相手にしなくなる。

かぐや姫と始めた文のやりとりで心を慰める。

#### IV 昇天

「八月十五夜」天人たちがかぐや姫を迎えに降臨。

かぐや姫、別れに当たり、帝への思いを文にしたためる。

「天の羽衣」を着せられ、別れのつらさも消えて、昇天。

翁や嬪、「血の涙」を流して悲しむ。

帝、昇天したかぐや姫への思いを届けるべく、富士山頂で文と不死の薬を燃やさせる。

れ蓑」の異能は失われる。

妊娠中、女姿に馴染めないまま里邸で過ごす女御と、文のやりとりをする。

#### IV 昇天

「八月十五夜」の翌日、右大将は正体を暴露され、〈昇天〉の思いは頓挫。

院の四十の賀のおり、七人の天女降臨、女院に昇天を促すも、地上にとどまる。

父大臣、女院の稀有なる宿世を噛み締め、満足裡に往生の素懐を遂げる。

父の死に無常を観じた女院は、じしんの「さらぬ別れも」も覚悟する。

院の女院に対する一途な愛情は変わらぬいつぼうで、女院の院への思いのほとは、不明のまま。

こうして見較べると、たしかにここでは、「この世の契りは竹の中に結びければ、下れる人のことこそは見ゆめれ。」と擲揄された、竹取の翁から否応なく漂う、非貴族的かつ粗野な臭いを消し去って、洗練された高貴な人々のみによって練り広げられる華やかな世界へと、みごとに面目が一新されている。「ひとつ家の内は照らしけめど、もしきのかしこき御光には並はずなりにけり。」とするかぐや姫の存在感への物足りなさについても、たつたひとりで、当代随一の貴公子として輝かしい事績を残すいつぼう、入内するや女としての最高の栄誉まで手に入れ、父の期待の遙か上をゆく活躍をするこゝとで、一家の繁栄を守り、将来へと繋ぐスーパー・ヒロインを物語の中心に据えたことにより、じつは古めかしい『竹取物語』の骨格をしっかりと踏まえたものでありながら、すべてにおいて桁違いのスケールアップを果たした、じつにモダンでスタイリッシュな（かぐや姫の物語）が、ここに誕生したのである。

ただし、かぐや姫の昇天の場面をとおして浮き彫りとなつた、「いとけうらに、老いをせずなむ。思ふこともなくはべるなり。」（七〇頁）とされる天人を前に、その無力さを露呈し、卑小かつ猥雑な存在であることを思い知らされながらも、痛切な「あはれ」との感情に囚われ、そこから逃れられないこ



とにより、むしろ人間は人間たりえていたのだ、といった、逆説的な人間肯定の姿勢をとることにより、読み手の自己認識をも覚醒、更新させずにはおかない『竹取物語』の発する力強いメッセージ性は、さすがに顔唐期の物語らしく、もはや『在明の別』の受け継ぐところではなかった。ここでは、複雑に絡み合うさらに苛烈な人間模様のなかで、やすやすとは共感、共有できないものとして、それは留保されている。むしろ、そうした関係性を築くことの困難さこそが、この『在明の別』では見詰められているように思われる。そのあたりの詳細についても、前掲拙著・前編の各章において縷説した。参照を乞う。(二〇二一年一月稿、九月補訂)

#### 〔付記〕

本稿は、前掲拙著の「あとがき」の末尾に、

最後に、本書で検討が及ばなかったことに、『在明の別』とは、『竹取物語』の壮大なるアップグレード作品、ハイパー（かぐや姫の物語）とでも称すべきものであることに、原稿提出後に思い到ったということがある。（中略）もっと踏み込んだ両者の関係性については、ぜひとも明らかにする責務を感じており、「あとがき」を書く暇があれば、今のうちにかたちにしろと、じしんに言い聞かせているところである。（三五七頁）

と記すことで、じしんに課していた宿題への、答えとなっている。

また、退職を控えた二〇二一年二月十九日（金）の午後、オンラインで開催された最終講義において、本稿の概要をお話する機会を得た。関係各位にお礼申し上げたい。

さらに、前掲拙著については、琉球大学の萩野敦子氏による書評が「図書新聞」3503号（二〇二一年七月十日）に掲載され、そこでも、右の「あとがき」に記した拙論への興味を示していただいた。ありがたいことである。あわせて、「図書新聞」当該号を自宅宛てにお送りくださった、九州大学出版会の尾石理恵さんにも、お礼申し上げます。

（からしま まさお・九州大学名誉教授）